

令和元年度 第1回燕市総合計画審議会 議事録

| | |
|-----|----------------------------|
| 日 時 | 令和元年7月3日(水) 午後1時30分から3時30分 |
| 場 所 | 燕市役所 委員会室 |
| 欠 席 | 田野委員、西川委員、大塚委員、真島委員 |

1. 開会

<事務局より開会のあいさつ>

2. 委嘱状の交付

昨年度末の任期満了に伴い、新たに委員に委嘱する。委嘱状については、机上配付とさせていただいた。審議会は、燕市総合計画審議会条例に基づき、市長の諮問機関として設置されるもので、任期は令和3年3月31日までの2年間。

3. 市長あいさつ

まずもって、総合計画審議会委員をお引き受けいただき、感謝申し上げます。第2次燕市総合計画は、平成28年度からの7か年計画であり、今年度は中間の年度にあたるため、前半部分の進捗状況・成果を検証し、残りの3年にいかに繋げていくかを考える年です。全国的に人口減少社会への対応が大きな課題になっている中で、燕市の総合計画においてもそこをメインに打ち出し、地方創生に向けて取り組んでいく内容となっています。これまでの成果について、データに基づいて後ほどご説明しますが、総じて言うと、なかなか目標通りに行っていない部分が多いものと思っています。1つ1つの事業を見ていくと、自然動態であれば、不妊治療費助成によってこのくらいお子さんが生まれたなど、それなりに成果が出ており、社会動態であれば、住宅取得支援制度やUIターン促進の取組みによって市外からの流入が増えたなど、成果は出ています。一方で、全体としての人口動態に目を向けると、出生数でいえば、一昨年は496人、昨年は500人であり、この計画を策定したときは600人を維持していくものでしたが、ここ1,2年は大幅に落ち込んでいます。社会動態についても、当時は年々社会動態のマイナスが減少傾向でしたので、±0を目指そうというものでした。第2次燕市総合計画が始まって以降、東京一極集中が拡大し、ここ1,2年は250人程度の転出超過になっており、人口減少が非常に加速しています。こういう現実の中で、いかにこの計画の充実を図り、人口減少に歯止めをかけるか、ということが課題であると認識しています。昨年より、こうした状況のデータが見えてきましたので、庁内でプロジェクトチームを立ち上げて、分析や施策のアイデア出し等を行ってきているところですが、我々の知恵だけでは限界がありますので、幅広い立場の皆様からアドバイスをいただき、人口減少に歯止めがかけられるよう、さらに取り組んでいきたいと思っています。今年度は、人口減少にテーマを絞った総合戦略の策定と、幅広い分野の総合計画の中間評価・見直しを同時に進めていく予定ですので、ご承知おき頂きたいと思います。新潟県は総合計画と総合戦略戦が一体化していますが、燕市は総合戦略を先に策定し、総合計画は条例に基づき策定しているので、タイムラグがあります。内容に重複する部分があり紛らわしいのですが、ご理解くださいますようお願いいたします。今日は後列に学生の皆さんが傍聴しています。市町村の会議でこういった若い人たちが参加することは珍

しいと思います。若い人たちの未来のために、どうやって自治体を残していくのかは重要なテーマであり、若い人たちにしっかりと引き継いでいくために非常に重要な計画であることをご理解いただき、ご審議くださいますよう、よろしくお願いいたします。

4. 委員の紹介

<名簿順に事務局より紹介>

5. 会長、副会長の選出

燕市総合計画審議会条例に基づき、会長、副会長は委員の互選によることになっている。いかがお取り計らいすればよいか。

発言がないようなので、事務局案を示しても良いか。

<異議なし>の声

それでは、事務局案として、会長に新潟大学の宍戸委員を、副会長に新潟工科大学の樋口委員を推薦したいが、いかがか。

<一同拍手での承認>

<会長、副会長あいさつ>

(会長)

新潟大学経済学部宍戸邦久と申します。昨年に引き続き、重責を務めさせていただきますが、皆様のご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

(副会長)

新潟工科大学の樋口と申します。会長を補佐し、皆様と一緒に、審議会が滞りなく進むよう、協力させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

6. 報告

(1) 第2次燕市総合計画の中間評価・見直し及び第2期燕市まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定について

<事務局より資料1の説明>

<質疑応答>

なし

(2) 市民意識調査の調査結果について

<事務局より資料2の説明>

<質疑応答>

なし

7. 協議 題

(1) 第2次燕市総合計画成果指標の平成30年度達成状況について

<事務局より資料3の説明>

<質疑応答>

(委員)

- ・ふるさと燕応援寄附金の寄附者数が驚くほど多い。市役所はじめ、いろんな方の努力だと思うが、どういう風に使われたか、皆さん注目していると思う。使用の状況について、現在も公開していると思うが、市民の意見を聞いてみるのもいいのではと思う。

(事務局)

- 学校のエアコン設置のクラウドファンディングを含めて、平成30年度は16億8,000万円のご寄附をいただいた。寄附者に対しては用途をお伝えしており、市のウェブサイトでも公開している。ただ、議会からも使い道を市民に広く伝えるべきとの指摘があり、今までの方法の他に広報などでもお知らせしたいと考えている。

(会長)

- 市民の意見を聞く機会は設けているか。

(事務局)

- 設けていない。ただし今回のエアコンのように、市の提案に対して議会の審議を通じて事業を進めている。

(委員)

- ・雇用の政策について、資料の22ページの経年変化を見ると、重要度が高く、満足度が低い。先日、県の人口減少ワーキングチームにて、ハローワークの担当の方と意見交換をした。進学の際に東京圏に進学した人について、今どきの学生は就職サイトを利用しており、地元の企業名が思い浮かぶかがUターンにとって重要とのことだった。そこで、燕市のホームページを見てみたのだが、市内企業を紹介するポータルサイトが見つからず、移住、仕事、就職のページを見ても、なかなかたどり着かない。ツバメビトという冊子ももらい、QRコードを読み込んだら、つばめジョブナビがあった。ただ見つけにくいので、この部分の施策をどう意識しているのか。学生や第二新卒の声を聞いて改善する余地はあるのか。

(産業振興部)

- 市のウェブサイトには直接企業を紹介するページがないので、今後考えていく必要があると思っている。現在、取組んでいる施策としては、高校生向けには、就職説明会の開催のほか、商工会議所の工業部会と連携して市内の事業所を訪問し、実際に見て知っていただくことをしている。就職先の決定は学校の教員や親御さんの影響が大きいので、そういった方向けの企業説明会などの開催も予定している。大学生向けには、産学協創スクエアという、宿泊もできるインターンシップの施設を整備した。専門のコーディネーターが企業と大学の双方のニーズをマッチングし、インターンシップを行っている。昨年は290人ほどが利用し、市内の企業を知っていただいた。市内企業の周知は非常に大事なので、今後考えていきたい。

(委員)

- 新潟市や三条市のホームページでは、関連しそうなところをクリックすると、必ず市内就職の

ための企業情報やメール配信の登録にたどり着くようにしてあるので、ウェブサイトの充実もご一考いただきたい。

(委員)

- ▶ 今のディスカッションのように、今はウェブの時代。燕市では現在、YouTubeなどでUI ターン
の宣伝をしているのはわかるが、ウェブでの情報発信を更に充実していただきたい。

(委員)

- ・人口減少対策において、急速な少子高齢化に対しては、いろいろな施策をしても全体では数値に表れていない。この会議では「成果が出ていませんね、引き続き頑張ってください」というのが無難なのかもしれないが、私としては、関係公共団体選出ですので、そこに持ち帰って、もう一度下から積み上げていくような、抜本的な見直しをしないで未来にツケをまわしてはいけないと思っている。施策については、これが良くないというものはない。むしろ、より細かく対処するなどが必要だが、一つ一つのことについて、丁寧に積み上げる、対処することが大事だと思う。

(事務局)

- ▶ 議会でもそういった質問があった。ここ2年の人口動態の数値が悪い。総合計画の中間評価、総合戦略の第2期の策定においては、人口減少、少子高齢化対策が中心であると考えている。ただ、全国的な地方の課題であるので、特効薬はないのが現実。その中で、市内の人口減少対策プロジェクトチームでは、要因分析と有効な施策を検討している。できれば、皆様からも、各団体に持ち帰っていただき、それぞれご意見をいただければ大変ありがたい。

(会長)

- ▶ 人口減少対策プロジェクトチームというのは、いつごろを1つのゴールとしているのかなど、スケジュール感はどうなっているのか。

(事務局)

- ▶ 昨年度の場合は、今年度予算に反映するものがあるのかを、途中の段階ではあるが区切りとした。その後も引き続きやっている中では、来年度の予算編成を開始する今年の10月ころに向けて、施策の充実、新規施策の創設に取り組んでいる。総合計画の見直し検討に関係するものがあるかもしれないので、検討結果が間に合うのかどうかもあるものの、できるだけ皆さんにもお知らせしたい。

(委員)

- ・少子高齢化で人口が減少しているのは燕市だけではなく、全国的な傾向だが、燕市は魅力がない。ではどういう市であれば魅力があって、どういう商店街であればお客さんがきてくれるのか、そういうことをもっと市民から広く意見を聞いてはどうか。人が集まるところでなければ、人は来てくれない。大学で県外に行って戻ってきてもらえない。なぜ戻ってこないのか、とにかく大勢からいろんな意見を聞いて、どういう風に市民は思っているのか、どういうところなら戻ってきけるのか聞くということも1つの方法だと思う。

(委員)

- ▶ この件については、非常に興味を持っている。まず、県外にいった学生が帰ってこないのは地元
に魅力がないから。個人的に全国を旅してまわったことがあるが、市町村における人口流出

問題については、ほとんどの市町村が問題視している。実際にそれに対処している市町村はある。そういった成功事例はどのくらい把握しているか。そこは何をもって人口が増えているのか。一定の世代だけ集まっても困る。高齢者に優しい市をつくれれば高齢者は集まってくるので、人口は増えるが財政を圧迫する。世代によって感じる魅力は違うので、若い人たちが集まる市にするには、どうしたら良いのかが一番の課題だと思っている。群馬県子持村（現渋川市）で面白い企画をやっている。合併した時に、市営の遊園地があった。1年に1回、遊園地を開放し、大人がおもいきり楽しむ姿を子どもに見せる。地元にも面白いところがあるということ、子ども心に印象付ける取組みをしている。非常に面白いと思った。実際に、人口流出に歯止めをかけているのかどうかは把握していないが、実際に成功している市町村は多々あると思うので、資料に盛り込んでいただければ今後の検討材料になると思う。

（事務局）

- ▶ 様々な年代、立場の方の意見を聞くことは大切なことであるので、今後もそういった取組みは充実させたい。また、他団体の成功事例については、人口減少対策プロジェクトチームで調査研究しているが、成功事例が燕市で効果があるのかは別の問題としてある。人口が増えている自治体は大都市のベッドタウンの場合が多い。そういった中でも、燕市で効果があるのかどうかは、事例を研究しながら、施策の検討をしていく必要があると考えている。

（委員）

- ・人口減少の問題は急がなければならない。成功事例が燕市に向くかどうかは別問題であることはわかるが、燕市だからこそできること、田舎暮らしなど。燕市に住んでいると、燕の魅力が良くわからない。あるのが当たり前、ないのも当たり前。広く意見を聞いたほうが良いと思う理由は、昨年、中学3年生が10名くらい、うちの店にインターンシップに来た。一人ずつ意見を聞いたところ、土日はみんな大きなお店に行くとか、街なかには6時7時になると暗くて一人じゃ歩けない、もっと身近に楽しめるものがあれば、みんな街なか遊びに行くのではないかとのことだった。その中でも、一人が言った「魅力がない」という一言が印象に残っている。魅力のある商店街をつくるのは難しいが、市をあげて、どういうことをしたら魅力を引き出せるのか、急がないといけない課題だと思う。

（事務局）

- ▶ 燕市の魅力がないとは思っていないが、発信のしかたが重要なのだろうと思う。燕市の強みは、働く場があり、自然環境が良いところ。そういった部分については移住してきた方の声を広く聞き、PRしていくなど。実際に移住してきた方が、街なかで様々な活動をしているので、そういったことなどのPRを考えていきたい。

（会長）

- ▶ 私も学生を連れて燕市の街なかを歩いたり、施設を見たりしたが、一つ一つは面白い、魅力があると学生は言っている。県内外の出身者の意見である。なのに、なぜうまくPRできていないのか。就職ナビの指摘でもあったが、調べてみればある。パンフレットもウェブもある。されど、そこまで到達できない。パンフレットなど、一つ一つを見れば素晴らしいが、そこに到達できなければ、ないに等しい。魅力の発信の工夫をすれば、効果は増すのではないかとのご提案。

(委員)

- ・分水高校も吉田高校も、基本的に就職や進学は県内が多いので、人口の社会減にはあまり関わっていないと思う。ところが、燕市の生徒の多くは大学進学を希望し、市外に出ていく。進学校では、勉強と部活に追われて、地域から切り離された生活をしている場合が多い。そうすると、大学受験校選びでは、地元に戻って何かをしようという発想はなくなる。極端に言うと、国立大学を希望する場合、センター試験の得点によって第一志望ではないがこの大学にしよう、得点が良いければ難関大学にしようとか、そういう進路選択をすると、地元に戻る選択肢は減っていく。進学校は人口流出を促していると言っている先生もいる。私自身も本当にそうだと思う。高校生であっても、地域と切り離されてはいけない。高校生は大人として扱っても良いと思うので、一市民としてできるだけ地域と関わり、地域の魅力に気づいてもらった上で、市の抱える課題を高校生にきちっと伝え、それを高校生が学ぶことによって、「自分はふるさとが大好き」、「自分はふるさとを元気にするためにこの大学に行って、これを勉強したい」、と思うきっかけになるのではないかと。なので、大学は県外でも良いと思う。何がしたいかということによって進路選択をしてもらい、それをそこで学び、燕市に戻るといったキャリア教育を考えたい。燕市、弥彦村との協働事業を受けて、昨年と今年度については、燕市の企業や観光協会、市役所の方に来ていただき、1年生が全員そういった学習をすることで、地元で貢献できる人材の育成を行っている。でも、ほかの市の高校に行った燕市の子どもをどうするのかという問題が残る。地域社会と連携することは、地域に開かれた教育課程ということで、新学習指導要領の中で求められている。そうすると、三条市の高校にいった子どもは、おそらく三条市と連携した学びをするのではないかと。新潟市もそう。そうなったときにどうしたらいいのかと考えているが、中学までに地元の魅力を気付かせる取り組みや、高校でやろうとしている取り組みに近いことを中学までに行えば、高校や大学の進路選択に繋がり、最終的に地元に戻ってくるのではないかと考えている。中学生で進路決定をするのはなかなか難しいかもしれないが、1つの視点として考えられるのではないかと。また、市外在住の者として外部から見た燕市だが、大河津分水と良寛を総合学習の軸としてきた学校なので、非常に素晴らしいと思っている。一方燕市の政策について、県下でも若者への支援は充実していると思っている。ただ、全体的にまだ盛り上がりにかけているのではと思う。また、燕市で育った子どもだけではなく、そうじゃない人も居住していればいい。最近知ったのだが、燕市に、倉庫を改装してゲストハウスをつくった方がいる。1泊2,000円か3,000円でやっている。運営資金をファンドで募集してつくったと聞いた。今年オープンしようだが、そういった面白い若者がいよいよ動き始めた。そのうちモデルとなり、県内や県外から見学にくるようなところになっていくのではないかと、わくわくしている。

(事務局)

- 若者のまちづくりへの参画については、分水高校、吉田高校ともに、まずは市長が出向き講義を行っている。その後に市役所職員が行き、地元企業の方からも講義をしていただいくなどして、地域を理解してもらい取り組みを始めている。また、若者会議の中の燕ジョイ活動部については、市内の高校生からも自由にやりたいことをやって、まちづくりに参画してもらおうと、大学生を含めて実施しているが、発信が足りないのは自覚している。盛り上がりには欠けるとのご指摘については、発信の仕方によるのだと思うが、現在活動しているメンバーは相当やる気を感じるの、今後にご期待いただきたい。また、燕地区のゲストハウスの件だったかと思う

が、移住した方が開業された。そういった若い人の動きは、吉田地区でも分水地区でもあるので、いろいろな形で発信していきたい。進学などで首都圏に行った人でも、いずれは戻ってきていただきたいので、燕市と繋がりを持ち続けることを目的とした「東京つばめいと」という組織をつくった。今後も継続的に取組んでいきたい。子どもたちからの郷土愛は大切であり、教育委員会でも一所懸命に行っているのです、その点は教育委員会から答えてもらう。

(教育委員会)

▶ ふるさと回帰について、教育委員会としては学びの連続性を大事にしており、保育園のころから「つばめっ子かるた」という、燕の良いところをカルタに読み込んだものを使い、保育園から小学校にかけて、カルタ大会などの開催などにより、ふるさとに愛着をもってもらう取組みをしている。小学生向けでは、「燕ジュニア検定」という、産業や文化などに関するご当地検定を実施している。中学生向けでは、「Good Job つばめ」という、中学1年、2年生が市内企業などで計5日間の職業体験をするといったキャリア教育をしている。高校生向けには、「羽ばたけつばくろ応援事業」という補助金を創設し、地域資源を活かした若者の活動を支援している。

(委員)

・ハローワーク巻管内の有効求人倍率は、直近の5月で1.45倍であり、県内13管内で上から5番目に高い。求人はそれなりにあるのだが、求人倍率が高い要因の1つに、求職者の数が減っている傾向がある。管内に仕事を求める求職者は年々減少しており、年齢別にみると、唯一55歳以上の求職者登録が増加している。特に65歳以上の増加が著しく、比例して実際に就職する高齢者も多い。高齢者なので、パートの希望が多い。市の施策を見ると、高齢者対策は生きがい対策が中心のようだが、高齢者の就業対策も今後捉えていく必要があるのではないかと思います。

(産業振興部)

▶ 企業側のニーズを十分聞きながら進めていきたい。若手を中心に、子育てが終わった女性までを視野に様々な施策を実施しているが、高齢者はシルバー人材センターの活用を考えがちで、企業人材としての活用が視野に入っていなかったため、高齢者側の持つスキルや、企業側のニーズを踏まえながら考えていきたい。

(委員)

・総合計画はあまりにも範囲が広すぎて、何をベースに審議したらいいのか、頭がぼやけてしまっている。目標数値がそれぞれあるが、それが高いものと低いものがある。単純に何をベースに目標数値を設定しているのか。

(事務局)

▶ ②は計画策定時の基準値であり、計画ができる前の数値を示している。計画ができて、各種施策を展開することで、この数値をここまでもっていき、過去の実績からここまで伸びるだろうと設定したのが⑥の中間目標値であり、⑦の最終目標値となっている。

(委員)

▶ 低い目標値は、そもそも計画策定時において困難なことという位置づけの中での低い設定なのか。例えば5ページ「高齢者の生きがいづくりや介護制度の充実に対して満足と答えた人の割

合（市民意識調査結果）」では、アンケートの対象が高齢者だと思った。満足と答えた人の割合が半分以下というのは、選挙じゃないけど6割切ったら民意じゃないような意見もある中で、30%、40%を目標値にするのが、私としてはいかなものかという気がする。また、このページの一番下「障がいのある人への支援に対して不満と答えた人の割合（市民意識調査結果）」では、実際に障がいのある方にアンケートしたのか、障がいのある方の中にはアンケートに答えられない人もいると思う。親御さんに対するアンケートなのか。つっこむとキリがない。

（事務局）

- ▶ 先ほど、「6. 報告（2）」で市民意識調査の説明を行ったが、この2つの指標は市民意識調査の結果を用いているため、高齢者だけ、障がい者だけを対象にアンケートを実施したものではない。一般的に市民の方が感じている結果であると考えてもらいたい。

（会長）

- ▶ ある意味、今回は中間見直しということで、目標が達成できたかという中身の話とともに、計り方も論点になるのではないかと思われるので、事務局からは今後も丁寧な説明をお願いしたい。

（副会長）

- ・この計画の策定段階から携わっているが、非常にいい数字がでていっているものと思っている。皆様からは厳しい意見があるが、県内全体がこれ以上に厳しい状況になっている。新潟だけではなく、全国の地方都市が同じような状況である。政権はそれを反転させようと一所懸命にやってはいるが、地元は何ができるかという、いい場所を作っていく事しかないと思っている。例えば、「特定空き家等の件数（13 ページ）」はもともと86件あったのが、今は69件と解消されてきているし、「移住・定住人口数（13 ページ）」は毎年200人～300人とかかなりの方が来られている。そして「ふるさと燕応援寄附金の寄附者数（10 ページ）」は7万人の方が燕の応援をしていると。その中でも一番大きかったのは、「社会動態（6 ページ）」の減少数。どういう年齢層がどこに行っているのかを分析されたほうが良いと思う。指標に設定した段階では、18歳の女子学生が転出して行って、帰ってくる率が低いのが大きな課題であったように思う。男子学生は帰ってくる目が向いていて、女子学生は帰ってくる率が少ないのであれば、対象を分けて対策を考える事が必要かと思った。悪いところよりも良いところを伸ばしつつ、燕に帰ってきたときに誇れる場所を少しでもつくっていくよう、施策に展開してほしい。

（会長）

- ・議事進行がうまくいかず、すべての委員の皆様から発言いただく時間がなかった。次回は8月ということなので、またその機会にもご発言をお願いしたい。

8. その他

（会長）

- ・委員の皆様から、本日全体の会議について質疑、ご意見はないか。
 - ▶ なし

(会長)

- ・事務局からは何かないか。

(事務局)

- 今回、委員の皆様からご審議いただいた内容については、市議会に報告するとともに、市の公式ウェブサイトにて公開させていただく予定としている。また、今年度の審議会は、全部で4回の予定であり、第2回の審議会は、8月5日(月)の午後1時30分より、この会場で開催予定となっている。案内を机上に配布させていただいたので、ご参加くださるようお願いしたい。

(会長)

- 審議の内容は議会報告およびウェブサイトに掲載ということだが、委員の名前は掲載するのか。

(事務局)

- 議事要旨という形で、「委員」や「事務局」「会長」などを記載し、個人の名前は公表しない。

9. 閉会

以上